

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	120分
-----	--------------	------	------

- ・近代の日本語が恋愛など人生についての文学的な省察を損なっていると述べた随筆からの出題。
- ・本文の分量は昨年度とほぼ同じであった。すべて記述説明であり、設問数も五問と変化はみられない。解答欄の行数の合計は昨年度(16行)に比べ18行と若干増加した。
- ・総合的にみて、全体の難易度は、ほぼ例年並とみられる。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問二がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	<input type="checkbox"/>
出典 (作者)	坂口安吾「恋愛論」(一九四七年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
<input type="checkbox"/>	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 傍線部の「苦勞」の内容を文脈に即して具体的に説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 「大いに疑っている」とする見方について、言葉と文化の関係に着眼して丁寧に説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 「あべこべ」という語が意味するものを対比的な構造のなかで説明することに工夫をこらす。
		問四	記述式	標準	傍線部の理由の説明する問題。(解答欄3行) 「ほんとうすぎる」ということの意味を明らかにしたうえで、それを筆者が「きら」う理由を説明する。
		問五	記述式	標準	傍線部について筆者の考えを説明する問題。(解答欄4行) 万葉集や古今集に対する筆者の評価を参照しつつ、「恋愛」について考え、書いて「文化」にしていくという筆者の考えをまとめる。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・ではしばしば評論や随筆がとりあげられている。だが、いずれであっても、文章の主題や筆者の主張を全体から的確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問のそれぞれがどのような意図をもっているか、その狙いを見極める訓練、その理解に応じた記述の練習を積み重ねておく必要がある。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	120分
-----	--------------	------	------

昨年は読書という営みや文学の持つ力について考察した随筆から出題されたが、今年は正岡子規が提唱した俳句における「写実」という概念をめぐる問題を指摘した、高浜虚子の随筆からの出題。解答欄は、昨年の計17行と同じ計17行。

設問は、何を書いたらいいかわからないという難問こそなかったが、問二や問四などやや説明に苦勞するものもあり、論述問題に慣れていなければ苦勞したと思われる。また問一や問三に付された条件について、きちんと留意できたかも答案の良否に関わったと思われる。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	高浜虚子「写生趣味と空想趣味」
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄3行) 『以前の空想的の感じが全く消え去る』といふ事については少なからず不安の念と不平の情とを禁じ得なかつた」というように筆者が感じた理由を問う問題。「夕顔」に即して的確に説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部を説明する問題。(解答欄4行) 「これはむしろその弊といつてもよからう」の、「これ」「その弊」の内容を的確に説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部を説明する問題。(解答欄3行) 傍線部に即しつつ、「春雨」を例にとつて説明する。「土」「アダム、イヴ」といった比喩的表現に留意しつつ的確に説明する。
		問四	記述式	標準	傍線部を説明する問題。(解答欄3行) 「玉石ともに焚くの恐れがある」について、「玉」と「石」を的確に説明しつつ、それを「ともに焚く」とはどういうことかを説明する。
		問五	記述式	標準	傍線部を説明する問題。(解答欄4行) 傍線部に即しつつ、「一半の功」「一境地開拓」「一握りの土」といった表現がどのようなことを指しているのかを的確に説明する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

- ・文系二では随筆が出題されたが、評論や小説を含め、できるだけ多様な文章に接しておくことが肝要である。こうした点は、出題ジャンルが固定されている他大学にはない京大独自の特徴である。
- ・昨年度は比較的新しい文章だったが、今年度は旧仮名遣いを用いた文章が出題された。文系二では比較的古めの文章が出題されやすいことは留意しておきたい。旧仮名遣いにも慣れておく必要がある。また、豊富な語彙力が要求されるのも京大ならではの傾向である。
- ・問題に取り組む際には、文章の主題と絡ませながら筆者の考えや思いを本文全体から大きく把握するとともに、個々の文脈の趣旨を的確に読み取っていくことが肝要である。その上で、理解した事柄を〈簡潔かつ分かりやすく表現する〉といった訓練は欠かせない。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	120分
-----	--------------	------	------

- ・近世の擬古物語『木草物語』からの出題であった。
- ・昨年の『義経記』とは異なり、非有名作品からの出題であった。
- ・今年は本文に二首和歌があり、そのうち一首が心情説明問題として問われていた。本文中の和歌に傍線を付して問う設問が四年連続している。
- ・解答数は昨年と同じで五つであった。
- ・2023年度にあった漢詩は今年も本文になく、漢文・漢詩の設問もなかった。

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『木草物語』 (宮部万女)
頻出度合 ・的中等	出典は稀
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加) 約980字 (前年は約960字)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	擬古物語	問一	記述式	標準	説明。A「くちをしき」、B「くちをしう」について、それぞれ誰の、どのような気持ちをあらわしているかを説明する。Aの「誰の」が「作者」であると読み解くことが難しい。(解答欄各3行)
		問二	記述式	標準	現代語訳。「適宜ことばを補いつつ」という条件付き。主体補充、「名にしおふ」「花」「ゆかしう」「思し」がポイント。「多くはもよほされ」の理解が難しい。(解答欄3行)
		問三	記述式	標準	現代語訳。「背く」「～果て」「見ぬ」「行ひ」「たのもしかり」「ぬべけれ」がポイント。(解答欄3行)
		問四	記述式	標準	和歌の説明。阿闍梨のどのような気持ちをあらわしているかを説明する。「花も色ぞ添ひぬる」の表面的な意味を解答に入れるかどうかで迷う。(解答欄4行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

- ・擬古物語からの出題は稀だが、典型的な古文の読解学習で対応できる。
- ・有名作品からの出題は、京大文系古文の一つの流れなので、以前も出題されている『源氏物語』を代表とする平安時代・鎌倉時代の典型的な文章にも慣れておく必要がある。
- ・近世の随筆・歌論からの出題も京大文系古文の一つの流れなので、論理的な文章にも慣れておく必要がある。
- ・今年も和歌についての設問があった。修辞、現代語訳、内容説明など和歌に関する対策は必ずしておきたい。
- ・今年は、漢文・漢詩の問題は出題されなかったが、2023年度やそれ以前にも出題されているので、漢文や漢詩を読む練習はしておく必要があるだろう。
- ・現代語訳は、人物の補い、指示内容の具体化などわかりやすい現代語訳が要求されている。本文全体の現代語訳ができるかどうか京大文系古文の根本である。文脈を踏まえた現代語訳の練習がいちばんに望まれる。
- ・心情説明はよく出題されているので、慣れておく必要がある。
- ・時には、古文常識についても出題されるので、十分に学習しておきたい。